

万行寺報

Mangyoji Jihō

発行 浄土真宗本願寺派 万行寺
住職 山崎信充
〒385-0003
長野県佐久市下平尾461-1
電話 0267-67-2460

2023(令和5)年

仏暦2566年

1月号

(第136号)

実践運動 総合テーマ『そとつながる ホツがつたわる～結ぶ絆から、広がるご縁へ～』

住職 法話

「正信念仏偈」を味わう

歸命無量壽如來
南無不可思議光
無量壽如來に歸命し
不可思議光に南無したてまつる

「現代語訳」
限りない命の如來に歸命し、思いはかることのできない光の如來に歸依したてまつる。

年が改まり、今年も、親鸞さま御誕生から八五〇年、そして浄土真宗が開かれて八〇〇年という年になります。本山の本願寺をはじめ、お慶びの慶讃法要が勤められます。さらに私事ですが、一九六三(昭和三八)年生まれで、今年六十歳の還暦を迎えます。そして、娘も同じうさぎ年生まれで十二歳を迎えます。

公私ともに節目の年を迎えて、私は一つの目標を立てました。それは、ご覧頂いていきますように、親鸞さまが御書きくださった『正信念仏偈』を味わうということでした。『正信念仏偈』は、親鸞さま著の『教行信証』の中にあり、「釈尊のまことの教えにしたがい、また浄土の祖師方の書かれたものを拝読して、仏の恩の深いことを信じ喜んでは、次のように「正信念仏偈」をつくつた。」と前文に書かれています。そして後文には、「以上、六十行百二十句の偈を終る。」とあり、漢字七文字で一句、二句で一行と数えて六十行百二十句の偈を作られました。略して『正信念』と言われて浄土真宗では必ず読まれ、お葬式でも読まれたり最も親しまれているお勤めです。

この『正信念仏偈』の御文を、毎月、二句一行ごとに六回(五年間)にわたって「住職法話」でお伝えしようと決意しました。そして、親鸞さまが生涯をかけてお伝えくださった御文を法語印という形で残していこうと思えます。(浄土真宗では御朱印と言いません)法語印は、寺報をお配りしている方々、そしてお寺への参拝記念にもお渡ししていきます。法語印は仏さまの大切なことばを字をもってお伝えするものです。何か仏が宿るとか御利益があるといったものではなく、一字一句を大切に味わって頂きたい思いを込めています。さて、今月の二句一行を味わいますと、「南無」はインドのことばを漢字にしたもので、これを中国では「歸命」と言い、そして日本では「信ずる」「順う」といった意味になります。阿彌陀さまの「汝を必ず仏にする、我を頼りにせよ」という喚び声に、「歸命」「南無」と自らの一切を阿彌陀さまにお任せする歸依信順といわれる、親鸞さまのよろこびに満ちた胸中が表れているところです。疑いの心など一切ない「信」と、ブレることのない「順」という流れに順う姿勢が表れています。そこまでして信順し尽くせる阿彌陀如來に出遇えたよろこびで「正信念仏偈」は始まります。

浄土真宗 新 仏事のイロハ

三、お墓と納骨

―亡き人を偲ぶ縁として―

「仏縁を増す」

分骨は「身を裂く」行為ではない！

これもあるご婦人の相談です。

「主人が亡くなり、遺骨をご両親の要望もあって、故郷のお墓に納めることになりました。しかし、何分にも遠い所なので、なかなかお参りに行けません。また息子もこちらで働いているので、将来のことを考えて、こちらでもお墓を建てようと思つています。ところが、分骨はいけない」と言われ、不安になりました。やめた方がよいでしょうか？」

こんな内容でした。

「分骨はいけない」と思っている人が確かにいるようです。分骨することによって亡

き人の「身が裂かれて」バラバラになり、亡き人が苦しむというわけです。

これは遺骨そのものを亡き人と見てしまう執らわれの結果です。亡き人は「骨」ではなく、限定して捉えることのできない存在になっているのです。そうした亡き人の遺徳を偲ぶ縁として遺骨があるのです。

遺骨を前にして、縁ある人びとが少しでも多く、亡き人を偲び、阿弥陀さまの広大な慈悲に遇うことができれば、むしろ喜ばしいことです。ですから分骨がいけない理由は、どこにもありません。お釈迦さまのご遺骨（仏舍利）のことを考えれば、なお一層はつきりします。

すなわち、荼毘にふされたご遺骨は、お釈迦さまを敬慕する各国の人びとによって八つに分骨され、それぞれの国に持ち帰って仏舍利塔が建立されます。そこからまた、

さらに分骨されて八万四千の仏舍利塔が建てられたと言われています。それだけ、お釈迦さまのご遺徳を慕い、教えを信じ喜ぶ人びとが多かったということなのです。また自ずと湧き出てくるお釈迦さまへの尊敬の念が、仏舍利塔すなわちお墓を建てしめたのでした。

こうしたお墓の原点を考えれば「分骨はいけない」という発想はわいてこないのではないのでしょうか。

「浄土真宗 新 仏事のイロハ」末本弘然著／本願寺出版社刊より



年忌法要表

1 周忌	2022 (令和 4) 年	23 回忌	2001 (平成 13) 年
3 回忌	2021 (令和 3) 年	25 回忌	1999 (平成 11) 年
7 回忌	2017 (平成 29) 年	27 回忌	1997 (平成 9) 年
13 回忌	2011 (平成 23) 年	33 回忌	1991 (平成 3) 年
17 回忌	2007 (平成 19) 年	50 回忌	1974 (昭和 49) 年

編集後記

昨年、お伝え致しましたように寺報紙面が変わりました。編集作業のしやすさを考えて、必要なものだけを残した形です。また、「住職法話」にもふれましたように、五年間にわたる続きものを始めることを決意しました。なるべくわかりやすくお伝えしていきます。よろしくお願ひします。